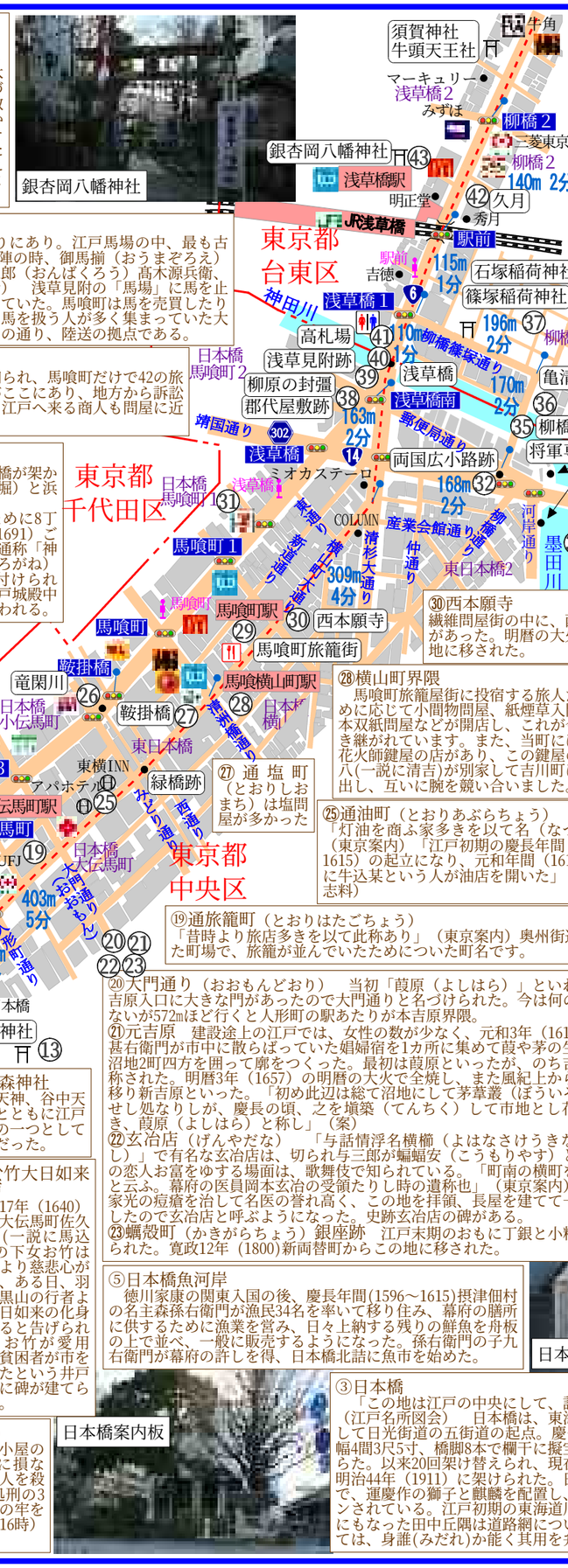
1 日本橋～千住宿

東京都中央区　東京都台東区
日本橋 ～ 浅草橋
（歩行距離 2408m 31分）

歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



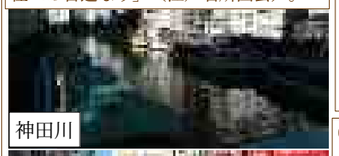
㊵浅草見附

江戸幕府は、主要交通路の重要な拠点に櫓、橋、門などを築き江戸城の警護をした。神田川は江戸城の外堀を形成している浅草御門のほかに筋違橋門、小石川門、牛込門、市ヶ谷門、四谷門、赤坂門、虎ノ門等三十六ケ所の見附（見張り番所）があった。

江戸三十六門の一つ浅草御門（見附門）は寛永13年（1636）に神田川に初めて架けられた。奥州・日光街道（現在の江戸通り）が通るこの地は、浅草観音への道筋にあたることから門は浅草御門と呼ばれ、また警護の人を配置したことから浅草見附と言われた。土塁を二重にして枡形で、一ノ門、二ノ門を建てて番所を置き、3千石以上の旗本が常に番士を配して警戒し、夜間は門扉を閉め通行止めとした。明暦の大火のとき、牢獄での非常時の罪人解き放ちを「集団脱獄」と取り違えた役人が門を閉めたため、神田・日本橋側から浅草の方へ避難しようとしていた一般民衆までもが行き場を失い、2万人以上が犠牲となった。明暦の大火後、浅草の奥に新吉原が出来てからは、観音参りに加え吉原通いの遊冶郎（ゆうやろう）達でさらに賑わった。吉原が盛んになると、この辺りから柳橋にかけては船宿ができ、吉原通いの基地となり、猪牙（ちょき）舟という郭通いの舟が行き来した。

㊶浅草見附高札場

浅草橋を渡った左に高札場があった。「神田川の下流、浅草御門の入口に架（わた）す。この所にも御高札を立てらる。馬喰町より浅草への出口にして、千住への官道なり」（江戸名所図会）。


神田川

浅草見附

㊸銀杏岡八幡神社

永承6年（1051）源頼義朝臣、同じく義家朝臣、奥州下向の時、に至りたまふに、川上より銀杏木の流れ来るあり。則ち義家公手ずから地にさし、誓って曰く、朝敵退治勝利あらば、この樹すみやかに枝葉を栄うべしとなり。遂にその戦勝利ありて、凱陣の時、ふたゝびこゝに至り給ふに、枝葉栄えれば、八幡宮を勧請し給ひしとぞ」（江戸名所図会）

銀杏岡八幡神社

㊷久月

天保6年（1835）5月、初代横山久左衛門が神田川のほとりに創業。天保時代は飢饉など社会不安の大きい時代。幕府は庶民の生活を引き締めようと躍起になっていたが、そんな中でも、滑稽本や人情本が盛んに出回っていた。

㊱亀清楼

亀屋清兵衛門が安政元年（1854）創業。明和3年（1766）、幕府は日本橋にあった吉原遊郭を浅草観音裏へ移し、その頃から柳橋は新吉原通いの猪牙舟（ちょきぶね）の発着場となり舟宿が並び、今の料亭や待合のもとになった料理茶屋が栄えるようになった。特に天保の改革（1841）で弾圧を受けた深川の羽織芸者が大挙して柳橋に移ってからは、江戸を代表する花街となった。（江戸老舗地図、江戸文化研究所編、主婦と生活社刊）

森鴎外の「青年」や永井荷風の「新橋夜話 牡丹の客」にも登場している。

㊲柳橋界隈の神社

柳橋は、明治時代「柳新二橋」と称され、花街として大変賑わった。花街には、神社、甘味処、料亭がかかせない。ここ柳橋界隈にも、小さいな神社が二つ祀られています。

石塚稲荷神社

料亭の多かったこの界隈を火事から守といわれる神社で、元禄元年（1688）浅草御蔵前元旅籠町の居住者有志の創建といわれ、小さな鳥居前の玉垣には、むかって左側から、柳橋料亭組合の文字を筆頭に、「亀精」、「柳光亭」など、数多くの料亭の名が刻まれている。これらは、隅田川を背にして並ぶ料亭の実際の並び方にほぼあわせて配列されているそうです右側には、柳橋芸妓組合、芸者の名前が刻まれてい。

篠塚稲荷神社

神田川が隅田川に注ぐ所に元禄11年（1698）架設されたので、はじめは「川口出口の橋」と呼ばれた。柳橋は享保（1715～35）頃からの呼称らしい。

㊴柳原の封彊（どて）

「筋違橋より浅草橋へ続く。その間長さ凡そ十町ばかりあり。享保年間（1716～36）この所の堤に悉く柳を栽ゑざせらる。…堤の外は神田川なり。又この堤の下に柳森稲荷と称する叢視（そうし）あり。故にこの地を稲荷河岸と呼べり」（江戸名所図会）夜鷹が出没し川柳で詠まれ、また、古着屋が多かった。

この土手は明治の初めに壊され家並みとなり、柳森稲荷だけが残った。

㉙馬喰町旅籠街

江戸時代は旅籠屋の町として知られ、馬喰町だけで42の旅人宿があった。これは郡代屋敷がここにあり、地方から訴訟関係で出てきた人々が宿泊した。江戸へ来る商人も問屋に近く便利なのでここを利用した。

㉖竜閑川

西通りと緑通りの間に竜閑川が流れ、橋が架かっていました。竜閑川は日本橋川（旧外堀）と浜町川を結んだ堀川。

明暦3年（1657）の大火後、防火のために8丁（約870m）の土手が築かれ、元禄4年（1691）ごろに町人たちの費用で堀割が開削され、通称「神田八丁堀」と呼ばれた。当初は白銀（しろがね）堀ともいわれたが、のちに竜閑川と名付けられた。竜閑の名は、日本橋川河口付近に江戸城殿中接待役井上竜閑の屋敷があったためと言われる。

㉔地本問屋跡

地本とは、江戸で刊行した本。洒落本・人情本・草双紙の類をいい、上方で刊行された絵本に対しての称。

㉚西本願寺

繊維問屋街の中に、西本願寺があった。明暦の大火後に築地に移された。

㉘横山町界隈

馬喰町旅籠屋街に投宿する旅人たちの求めに応じて小間物問屋、紙煙草入問屋、地本双紙問屋などが開店し、これが今日に引き継がれています。また、当町には、御用花火師鍵屋の店があり、この鍵屋の手代新八（一説に清吉）が別家して吉川町に玉屋を出し、互いに腕を競い合いました。

㉗通塩町（とおりしおまち）

「往時或は“しりまち”と称せしは、獄舎の役夫を此町より出せしに困るといふ」（東京案内）

㉕通油町（とおりあぶらちょう）

「灯油を商ふ家多きを以て名（なづ）く」（東京案内）「江戸初期の慶長年間（1596～1615）の起立になり、元和年間（1615～24）に牛込某という人が油店を開いた」（東京府志料）

⑪寶田恵比寿神社

「べったら市　十月廿日恵比須講前に開きて、恵比寿供用の浅漬大根其他を鬻ぐ。大伝馬町、通旅籠（とおりはたご）町、通油（とおりあぶら）町、緑橋際辺、其市場也」（東京案内）浅漬け大根をべったらべったらといって振り回したら、着物に糊がべったりとくっつくのでべったらという。

⑨十軒店（じゅうけんだな）跡

三月の桃の節句には、内裏雛や禿（かむろ）人形を、五月の端午の節句には、甲（かぶと）人形や鯉幟を売る仮店が十軒あった。寛永江戸図などに記載がある。十軒店の出店は、寛政(1789～1801)には41軒を数え、その賑やかさや雑踏ぶりが偲ばれる。この十軒店の名は、町名として大正時代まで残っていた。

⑧常盤橋門跡

この道を行くと、日本銀行の奥に常盤橋門跡がある。江戸城外濠の表正面で、現在は枡形門の石垣だけが残っている。浅草・千住を経て行く奥州街道の浅草口と呼ばれた江戸五門のひとつ。

④日本橋川

「橋上の往来は、貴となく賤となく、絡驛（らくえき）として間断なし。又橋下を漕ぎつたふ漁船の出入り、旦（あした）より暮（ゆうべ）に至るまで噭々（ごうごう）として囂（かまびす）し」（江戸名所図会）　小石川橋で神田川から分流し南東へ流れ、中央区の永代橋付近で隅田川に合流する。また、江戸大手門口と隅田川を結ぶ運河として重要な川であった。川の上は高速道路。

①高札場

日本橋南西詰、常盤橋外、浅草橋内、筋違橋内、半蔵門外、高輪大木戸を江戸の六高札場とよび、特に日本橋高札場は、幕府が法度・掟書・犯罪者の人相書などを板面に記して往来に示した。

その起源は、延暦元年（782）太政官府の命により往来に掲示して民衆に知らしめたことに始まる。以来、武家政権にも受け継がれ、これを全国的な制度として確立したのが江戸幕府である。日本橋由来記の碑がある。

⑦三浦按針屋敷跡

オランダ東印度会社東洋派遣隊の航海士であった英人ウィリアム・アダムスは、慶長5年(1600年)暴風のため大分県の佐志生に漂着しました。のち、家康の通商顧問になり、日英貿易の発展に貢献しました。（日本橋室町1-10）

⑩於竹大日如来井戸

寛永17年（1640）江戸大伝馬町佐久間家(一説に馬込家)の下女お竹は日頃より慈悲心が深く、ある日、羽前羽黒山の行者より大日如来の化身であると告げられた。お竹が愛用し、貧困者が市をなしたという井戸の跡に碑が建てられた。

⑬椙森神社

湯島天神、谷中天王寺とともに江戸三富の一つとして有名だった。

②晒し場（さらしば）

間口5間のこもぶき小屋のさらし箱に心中の死に損なった、女犯の所化僧、主人を殺傷した者が中心で、処刑の3日前の早朝に小伝馬町の牢を出て、暮れの七ツ時（16時）までさらされた。。

⑲通旅籠町（とおりはたごちょう）

「昔時より旅店多きを以て此称あり」（東京案内）奥州街道に沿った町場で、旅籠が並んでいたためについた町名です。

⑳大門通り（おおもんどおり）　当初「葭原（よしはら）」といわれた元吉原入口に大きな門があったので大門通りと名づけられた。今は何の痕跡もないが572mほど行くと人形町の駅あたりが本吉原界隈。

㉑元吉原　建設途上の江戸では、女性の数が少なく、元和3年（1617）庄司甚右衛門が市中に散らばっていた娼婦宿を1カ所に集めて葭や茅の生い茂る沼地2町四方を囲って廓をつくった。最初は葭原といったが、のち吉原に改称された。明暦3年（1657）の明暦の大火で全焼し、また風紀上から浅草に移り新吉原といった。「初め此辺は総て沼地にして茅葦叢（ぼういそう）生せし処なりしが、慶長の頃、之を塡築（てんちく）して市地とし花街を開き、葭原（よしはら）と称し」（案）

㉒玄冶店（げんやだな）　「与話情浮名横櫛（よはなさけうきなよこぐし）」で有名な玄冶店は、切られ与三郎が蝙蝠安（こうもりやす）と共に昔の恋人お富をゆする場面は、歌舞伎で知られている。「町南の横町を玄冶店と云ふ。幕府の医員岡本玄冶の受領たりし時の遺称也」（東京案内）玄冶は家光の痘瘡を治して名医の誉れ高く、この地を拝領、長屋を建てて一般に貸したので玄冶店と呼ぶようになった。史跡玄冶店の碑がある。

㉓蠣殻町（かきがらちょう）銀座跡　江戸末期のおもに丁銀と小粒銀が造られた。寛政12年（1800)新両替町からこの地に移された。

⑤日本橋魚河岸

徳川家康の関東入国の後、慶長年間(1596～1615)摂津佃村の名主森孫右衛門が漁民34名を率いて移り住み、幕府の膳所に供するために漁業を営み、日々上納する残りの鮮魚を舟板の上で並べ、一般に販売するようになった。孫右衛門の子九右衛門が幕府の許しを得、日本橋北詰に魚市を始めた。

③日本橋

「この地は江戸の中央にして、諸方への行程もこの所より定しめむ」（江戸名所図会）　日本橋は、東海道、奥州街道、中山道、甲州街道そして日光街道の五街道の起点。慶長8年（1603）橋の長さ27間4尺5寸、幅4間3尺5寸、橋脚8本で欄干に擬宝珠がある木橋を徳川家康により架けらた。以来20回架け替えられ、現在の橋はルネッサンス様式の石橋で、明治44年（1911）に架けられた。日本橋の文字は15代将軍徳川慶喜の筆で、運慶作の獅子と麒麟を配置し、街道の起点の意味で松と榎がデザインされている。江戸初期の東海道川崎宿の本陣主で、幕内の支配勘定並にもなった田中丘隅は道路網について「人身の骨髄有る如し。筋髄衰へては、身誰(みだれ)か能く其用を弁ぜん」その重要性を表現している。

⑥日本国道路元票

日本橋は、慶長8年(1603年)に初めて架けられ、その翌年、五街道の制が確立されてからは日本の中心、江戸繁栄の象徴となった。明治に入ってからは、この橋の中央が国内諸街道の起点と定められ、今も橋の中央に日本国道路元標が埋め込まれている。

㉛初音の馬場跡

「馬喰町三丁目の西北の裏通りにあり。江戸馬場の中、最も古し、慶長5年（1600）関ヶ原の御陣の時、御馬揃（おうまぞろえ）ありし所なりと云ひ伝ふ。御馬工郎（おんばくろう）高木源兵衛、これを預り奉る」（江戸名所図会）　浅草見附の「馬場」に馬を止め、ここは北への旅の基点となっていた。馬喰町は馬を売買したり扱う人が多かった。また逓送業の馬を扱う人が多く集まっていた大伝馬・小伝馬町、鞍掛け橋の地名の通り、陸送の拠点である。

㊳郡代屋敷跡

幕府直轄領の年貢の徴収・治水・領民紛争の処理などを管理した江戸初期以来、関東・東海地方の行政を司った関東軍代の屋敷があった。郡代職は幕府直轄地（天領）の年貢の徴収、治水、領民の紛争処理を行った。伊奈忠次の屋敷は常盤橋近くにあったが、明暦の大火で消失したので、この地に移ってきた。

⑭十思（じっし）公園

・江戸伝馬町牢屋敷跡　・吉田松陰終焉の地碑と歌碑・「江戸傳馬町処刑場」の石碑。大安楽寺境内は刑場跡だったため、刑死者を弔うための延命地蔵が祀られている。

⑮吉田松陰終焉の地　安政6年10月27日30才で没。安政の大獄(1858～1859)で捕らえられた吉田松陰・梅田雲浜・頼三樹三郎ら勤王志士50余人が刺殺された。

⑯江戸伝馬町牢屋敷跡

伝馬町牢は全国最大の牢で慶長年間(1596～1615)から明治8年(1875)までの270年間存続した。牢屋敷地は現在の大安楽寺、十思公園、十思小学校などを含む2618坪の広さであった。揚座敷（旗本の士）、揚屋（士分僧侶）、大牢（平民）、百姓牢（百姓）、女牢（婦人）の牢舎があった。

⑰石町（こくちょう）時の鐘

江戸時代には鐘をついて人々に時刻を報せていた。この鐘は、石町(現在の日本橋室町4丁目付近)にあったもので、近くに長崎屋があったため、「石町の鐘はオランダまで聞こえ」の川柳があります。宝永8年(1711)に鋳直したもので、高さ1.7m、口径93センチの和鐘です。現在は、十思公園に鐘楼を、設けて納めてある。

時の鐘は二代将軍秀忠の時代に、江戸の街に刻を知らせるために、最初に設置されたといわれる。ほかに浅草観音、上野寛永寺、市谷八幡、目白不動、赤城成満寺、四谷天龍寺、芝切通し、本所横川町の9カ所あった。　処刑はこの鐘の音を合図に執行されたといわれる。

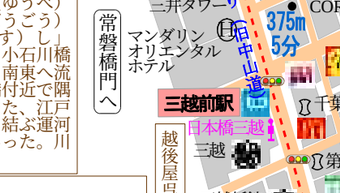
⑱石町

「名主宮辺又四郎默遁の事を司りしを以て此称あり」「此地昔時は六本木と称し、奥州街道の駅站（えきたん）なりしといふ」（東京案内）　古くは米穀商が多く集まっていたことから穀類を数える単位の石に由来するとされる。

吉田松陰終焉の地碑

江戸伝馬町牢屋敷跡

石町時の鐘


郡代屋敷跡

㉜両国広小路

明暦の大火後、「火除け地」として空地を設け、上野・浅草・両国が江戸三大広小路とよばれた。空き地にしておくのはもったいないということで、両国橋際には、よしず張りの小屋であればいいという許可が出た。ラクダや像など珍獣を見せる見世物小屋などの娯楽のみならず、小料理屋、大衆食堂、旅籠、船宿、屋形船が増え、芸者の置屋や髪結い、着物屋などが並び繁昌し、花柳界の芸者や歌舞音曲の踊り子など様々な人が暮らした。三味線の音が響き、江戸一番の繁華街は戦後まで続いた。

㉞両国橋

「浅草川の末、吉川町と本所元町の間に架（わた）す。長さ96間…。万治2年巳亥（1659）官府より始めてこれを造り給ふ…。その昔この川を（武蔵と下総の）国境とせしにより、両国橋の号ありといへども、今の如く利根川を以て境と定め給ふより、後は本所の地も同じく武蔵国に属すといへども、橋の号は唱へ来るに任せてその儘（まま）改められずとなり」（江戸名所図会）

隅田川に架かる江戸五橋のうち両国橋は千住大橋について古い橋で、万治2年（1659）に架けられた。武蔵国と下総国の両国をつなぐ橋。江戸時代に両国の川開きに花火大会があり、この日から隅田川に舟を浮かべて納涼をすることが許された。花火の日には、あちこちから屋形船、屋根船、猪牙舟（ちょきぶね）など、ありとあらゆる船が橋の下に集まった。

㉟柳橋

神田川が隅田川に注ぐ所に元禄11年（1698)架設されたので、はじめは「川口出口の橋」と呼ばれた。柳橋は享保（1715～35）頃からの呼称らしい。

㉝隅田川

「なほ行き行きて　武蔵の国と下つ総の国との中に　いと大きなる河あり　それをすみだ河といふ　その河のほとりにむれゐて思ひやれば　限りなく遠くも来にけるかなとわびあへるに　渡守　はや舟に乗れ　日も暮れぬ　といふに　乗りて渡らむとするに　皆人ものわびしく京に思ふ人なきにしもあらず　さる折しも　白き鳥の嘴と脚と赤き　鴫の大きさなる　水のうへに遊びつつ魚をくふ京には見えぬ鳥なれば　皆人見知らず渡守に問ひければ　これなむ都鳥といふをききて　名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと　よめりければ　舟こぞりて泣きにけり」（伊勢物語）

coffee time

忠臣蔵

両国橋を渡ると、明暦の大火で遺体を埋葬した回向院、その西に吉良邸があった。元禄14年（1701）赤穂浪士が吉良邸に討ち入り、吉良上野介の首を槍の柄にくくりつけて吉良邸を出たあと、一行は回向院へ向かったが、係わりたくないので入門時間外だとの理由で、門を開けなかった。そこで両国橋東詰の広場に赤穂浪士のことをやめて、浅野内匠頭の墓所である高輪の泉岳寺へ急ぐことにした。本所から泉岳寺に行くには隅田川を両国橋で渡って江戸市中に入るのが一般的だが、そうすると武家屋敷街を通ることになる。15日は大名・旗本の登城日だったので、両国橋を渡らず、そのまま墨田川に沿って南下し、町人の街を行き、永代橋で隅田川を渡り、泉岳寺へ向かった。

日本橋魚河岸跡

日本橋案内板

⑫日光街道道標

ASKAV日本橋敷地内に昭和58年（1983）建立の『旧日光街道本通り』の石柱。側面には『徳川家康公が江戸開府に際し御傳馬役支配であった馬込勘解由（まごめかげゆ）が名主としてこの地に住し以降代傳馬町と称された』